ヨーロッパ友好訪問

東海版編集委員長　大西　光夫

四月二十四日から五月六日まで、ヨーロッパの友党との交流を系統的・継続的に行なっていこうと、社会党ヨーロッパ視察団が西ドイツ、フランス、イタリアを訪問、ドイツ社会民主党、フランス社会党、イタリア社会党との交流を行なってきた。社会党中央本部前副書記長の曽我祐次氏を団長に団員十八人。ほかに新田俊三東洋大学教授とボン在住の政治学者・仲井斌氏が特別顧問として加わった。東海地方からは社会党三重県本部亀山支部の岡本博氏、同愛知県本部委員長の森下昭司氏らが参加した。そこで、東海版編集委員長の大西光夫が報告する。

西ドイツ　トロースドルフ市

開放的な市議会

昼間は仕事　議会は夜

議場はガラス張り　思い思いの服装で

実際私にとっては、機関的立場を離れた一私人としてのさまざまなカルチャーショックの方が強かったのであり、その感銘の方が見事に今回の訪問の意義を表わしていると思う。

前置きは、これくらいにして、そのカルチャーショックの中身に触れていきたい。記述の進め方は思いつくことから始めたいが、それは印象の強烈な順番になるのかも知れない。

ドイツでボン郊外のトロースドルフ市を訪問した。人口六万三千人。SPD（社会民主党）党員八百五十人、うち女性は二百人。党員組織率で人口の八％を超える地区もある。公務員は、ほとんどいずれかの党籍を持っている。

市長はSPDがとっている。議院内閣制なので、彼は市会議員であり、そして議会が始まれば議長を務める。同時に、このトロースドルフ市を含むノルトライン・ウエストファーレン州の州議員でもある（うーん、分かりにくい）。行政事務の責任者・幹部は別に選出する。

議会の構成はSPDが二十四人、CDU（キリスト教民主同盟）が二十四人、緑の党が三人である。

議会は月に一回、夜の六時から始まる。議員はみんな昼間は働いているので、月に数度開かれる委員会も夜に開かれる。さまざまな職業の人たちがいる。

ビーバーSPD議員団長が紹介してくれたが、副団長は煙突掃除人で、ほかにも一人いるとのこと。ほかに学生、教師、労組専従者、写真家などなど。町の政治を議論している。

議場で傍聴できることになった。日本の議場を想像していたわれわれにとって、何ともびっくりしたのは演壇や議長席が一段と高く作られているのではなく、平面のスペースに、いつでも移動できる机とイスが並んでいるだけである。集会場を想像すればよい。議員席は一つのテーブルに三人ほどが座れて、机の上にはジュースやコーラが並べられている。

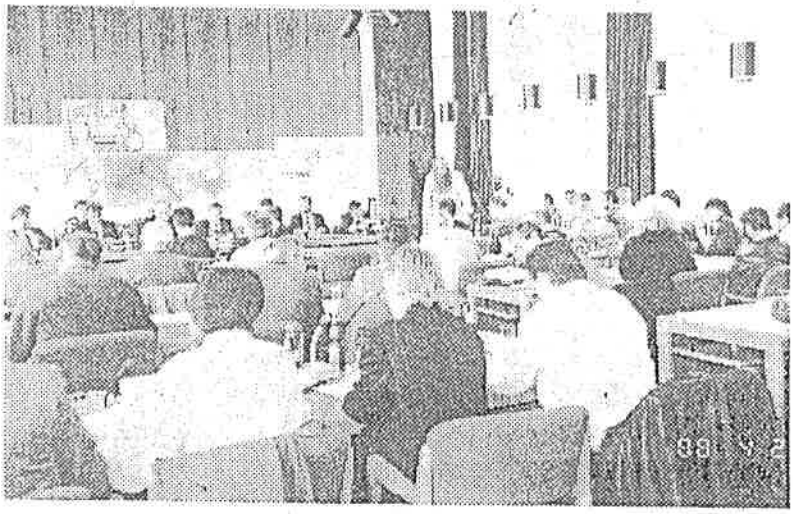
議員の服装はさまざま。ネクタイ姿は市長など執行部席の人たちほか数人。背中に届く長髪の男性議員もいる。角刈りに近い女性も。

いよいよ議会が始まる。市長が傍聴席の仲井先生を呼びに来た。議長席の前にイスが一つ置かれ、そこへ座れと言うことだが、何が起きたのかわれわれには分からなかった。

われわれ日本人の代表としてあいさつせよ、というのかと思ったが、違っていた。その日の議案に、「非核宣言をしている都市連合に連帯する決議」が提案されるが、ちょうど被爆国日本からあなたたちが訪れているので、議事進行の順番を変えて、この論議を最初にやるから通訳せよというのだった。ドイツ通の仲井先生までびっくり仰天してしまった。

儀式張ったことや建前論議がなく、実質的で、開放的、人間的なのである。そういえば、議場は一階にあり、両側はガラス張りだった。

（つづく）



トロースドルフ市の市議会。中央立っている人のいるところが演壇

ヨーロッパ政党記

東海版編集委員長　大西　光夫

国際部長も三十歳台

だが、青年党員の減少は世界的現象

先回、ドイツのトロースドルフという町での出来事を書きましたが、ヨーロッパにおける政治や民主主義の一端を感じていただければとの願いです。トロースドルフ市に今しばらく付き合ってください。

議員の任期は五年。報酬は月額五百九マルク（四万円ほど）で実費支給との考え。（日本より低い）

他に、議員一人＝百五十マルク（一万円ほど）の割合で市予算から各党の議員団に支給される。（日本にはない）

一回の選挙に十万マルク（八百万円ほど）必要だが、党で積み立てる。

感じたのは、日本と違って、政治は政党が責任を持ち、政党（組織）が主導するシステムになっていること。社会がそうなっている。

党員が人口の一・四％。多いところでは八％に達し個人の政治意識や参加意識が高く、しかも政党法という法律でそれを保障しているのだから、当然かも知れないが、なぜドイツは政党法をはじめとして、こうした政党（組織）主導の制度を作りあげたのか、また、それが可能だったのか、興味がわいた。

議員活動についても、行政との区別や各級議員の任務の区別がはっきりしており、それに応じて分担して活動をしている。細部まで確認できなかったが、各級議員がこん然と一体となり行政の補完役のような日本独特の「議員の世話役活動」はない。

政党主導、三権分立、民主主義の本願だろうか。それだけ、議員は本来の任務や本当の政治にエネルギーを注げることになる。

ちょっと、閑話を――。先回触れた「非核都市への連帯決議」は、緑の党とSPDが賛成し、CDUが「国政で扱うべき。われわれは決議に参加しない」と棄権。従って、賛成多数、反対なしで可決された。このCDUの論理は、日本の議会でも全く同じ。苦笑いの一幕であった。

トロースドルフ訪問に先立ち、四月二十六日、SPD本部で一九八四年から始まり、いま全党的に論議されている「新綱領」（一九五九年のバート・ゴーデスベルグ綱領に代わるもの）の説明を聞いたが、綱領委員会事務局のクリスタ・ミュラー女史の若さと美貌と迫力に圧倒された。

この「若さ」という点では、この後、次つぎとフランスやイタリアでも同じショックを受けることになる。

実際、〇〇国際部長、〇〇委員長と言っても三十歳代後半で、働いている書記や専従者も若い。そして、女性が多い。ローマで、ある地域支部の社青同委員長が出迎えてくれたが、二十一歳の大学生で、日本で見られる定年延長の青年ではない。

ただ、ドイツもフランスもイタリアもみんな「青年が入党しなくなった。政治意識はあり、環境保全や非核運動に参加しているのだが、政党に入らなくなった」と嘆いていた。世界的現象のようだ。

日本の場合は、政党に加入しないのは青年に限った話ではない。一億二千万人の国民に対して八万の社会党員、組織率〇・〇七％なのだから、青年がどうのという以前の問題である。

また、国民的な脱政治化傾向もある。これについて「日本では、奉権層の増大が大問題。あなたの国は？」と質問したが、どの国も「どんな選挙でも大体八五％～九〇％の投票率だ」との答えで、質問自体が不思議そうだった。（カルチャーショックII）

……

【おわび】先回の記事でトロースドルクSPD党員のうち、女性が二百人となっていたのは二百三十人の誤りでした。

左から仲井斌さん、クリスタ・ミュラーさん。右手前は党愛知県本の森下委員長

西ドイツ　社民党本部

女性多い若者の党

ヨーロッパ考察

東海版編集委員長　大西　光夫

＝3＝

西ドイツ社民党　新綱領の論議

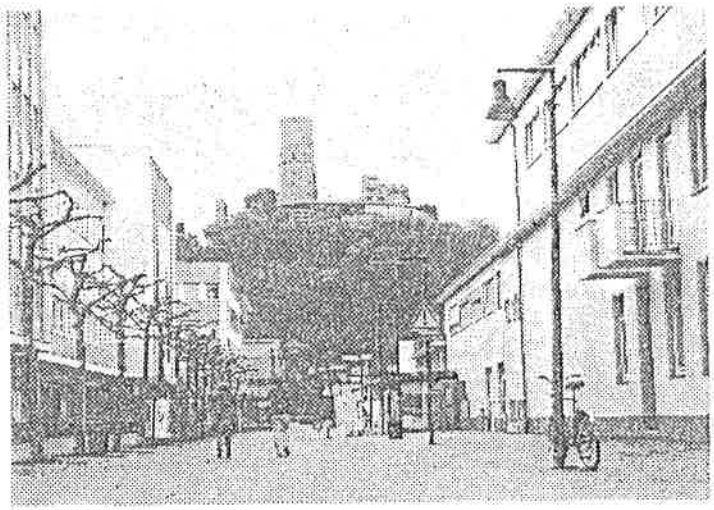
家事労働の価値見直す

科学、経済の発展はその〝方向〟が問題

今回の西ドイツ視察の主要な目的は、第二次大戦後の社会民主主義綱領として世界的にも有名で、「新宣言」の参考にもした「バード・ゴーデスベルグ綱領」（一九五九年）に代わる新綱領が論議されているというので、その論点や内容を知ることだった。前回紹介した綱領委員会事務局のクリスタ・ミュラーさんの話を聞いてみよう。

「綱領ができてから三十年が経過し、社会は変化、現状に合わない問題が出てきた。エコロジー（環境）問題、原発など科学技術の発展に伴う危険性の問題、男女の平等と未来における労働のあり方の問題、外交関係の変化、高い失業率の問題などです」と、論点を紹介。とくに強調したのが男女平等と労働の将来、失業問題についての論議だった。

論争の一方に立つ副党首のオスカー・ラフォンテーヌ氏の提案は「失業の解消のために、高所得者層の賃金カットを含む労働時間の短縮」で、クリスタさんは同提案賛成派。彼女は「八時間労働制は家庭と職業労働を両立させられない。われわれSPDの女性は、男女とも六時間労働制を提起し、家事労働と職業労働とを同価値と見なして、公的に保障することを提唱している。しかし、労組サイドからの反対もある」と説明した。



現綱領を決めた大会が開かれたゴーデスベルグの街並み。中央はゴーデスベルグ古城

労働時間について、ドイツは週三十六時間、ヨーロッパは大体この水準。やはり、日本人は働き過ぎだ。「男性の家事労働への理解は？」との問いには「口では賛成しているが、実践はあまり伴わない」と。

次に、環境問題や科学技術の制御の問題について、クリスタさんはチェルノブイリ原発事故を強調しながら「ゴーデスベルグ綱領は科学技術の発展や経済の成長を無条件で賛美したが、今日では、どういう方向への進歩か、が問題となっている」と指摘、環境保護や科学技術や経済成長を制御する方向を示唆していた。

このチェルノブイリ事故はドイツだけでなく、フランスやイタリアでも衝撃が強く、政策にかなり影響。イタリアでは国民投票で「原発の凍結」を決めているほどだ。

続いて、組織局のショウナウアーさんの話。その中心は組織や組織活動の実態がどうなっているのか、だった。説明のなかで耳に残ったのは「政権に就いていた間は党の主体性の危機に見舞われた。野党だと、論理的には首尾一貫し、主体性も確立しやすく美しい。しかし、これは政党のあり方としては間違っている」との言葉と、「新綱領により、エコロジー問題や女性問題を取り入れ、新たな党員拡大を目指す。クラシックな労働運動と新しい左翼知識人の連合が政権復帰のカギだ」との言葉。

政権を目指す、のは当然のことだ、というわけ。「新宣言」や「協力党員制度」の論議の中で、「党の主体性がなくなる」「綱領（理論）の論議では、党員は増えない」「水で薄まる」などの意見が出たのを思い出し、われわれ社会党は、この「政権を取る」ことの意味がまだ理解できていないのではないか、と思った次第。

（つづく）

ヨーロッパ労働事情

東海版編集委員長　大西　光夫

フランス社会党

大統領選挙

政党と労組の役割区別

政治意識高めるテレビ討論

フランスを訪れた時は大統領選挙のただなかで、もちろん、訪問の目的もそこにあった。

しかし、選挙の内容や分析は新聞などで報道されているので、ここでは今後注目すべき点に絞る。

ミッテラン氏は保守の分裂もあって、中道リベラルらからも支持を集め、「フランスの統合者として勝利した」（ル・モンド紙）と言われるが、旧来の左翼支持者を失ってもいる。今後どのように社会党の基盤を固めるかの問題と、極右ルペン氏の問題に注目。

ルペン氏は保守だけでなく、左翼とくに共産から票を集めたわけで、「共産党とは何だ?」という疑問も含め、どうなるのか興味が起きる。

選挙の争点でポイントなのは構造的な失業問題、治安問題、移民労働者問題。ミッテラン、シラク両氏のテレビ討論でも最大の争点だったし、ルペン氏の登場もこれに根拠がある。

二十八日、フランス社会党本部を訪れたわれわれにアクセル・クバール先進国担当全国幹事は「われわれは極右に断固とした態度をとる。シラク氏は曖昧（あいまい）だ」と批判、最終投票への方針を語ってくれた。シラク氏のルペン票の取り込み狙う攻撃に、ミッテラン氏が人間としての連帯やフランスの責任を強調していたテレビ討論のやりとりが思い出される。

失業に喪われる底辺労働者（旧来は共産党支持が多い）は移民労働者と職を奪い合う。治安も良くない。この状態が構造的に続いており、「失業者は犯罪の温床。移民労働者を排斥せよ」と主張するルペン氏に支持が集まる。日本でも、ジャパゆきさん問題は増えこそすれ、減ることはない。経済成長も永遠の栄華は続かない。人ごとではないと思う。島国根性が強く、排他的な民族性は非常に不安だ。

この問題はヨーロッパ共通の課題で、移民労働者は高度成長期にヨーロッパに来た。滞在中もレストランなどの給仕によくみかけた。「フランス人のやりたがらない仕事をやる」というわけで、ヨーロッパ自身が問われている。

アクセル・クバール先進国担当全国幹事に党40年史を渡す曽我団長（4月28日、仏社会党本部）右端が筆者

テレビ討論の話をしたい。ちょうど二十九日、ミッテラン、シラク両氏のテレビ討論を見ることができた。二時間あまり、面と向かってやり合うのだが、実にいい。視聴率五四%。政治意識の高さもあるが、テレビ討論の面白さもある。日本でも絶対やるべきで、政治意識が高揚し、投票率も上がるに違いない。

選挙運動の話を少し。実は、これに一番驚いた。どうも戸別訪問はない。戸別チラシや街頭チラシも少ない。ポスターを張った宣伝カーはあるが、候補者カーはない。大分様相が違う。

個人としての政治意識や参加・責任意識が高く、政策を中心に支持を決める。

日本型「周知徹底運動」や「お願いします運動」は必要ない。「労組は選挙運動をしない。自主投票。個人がやる」（フランス社会党本部、アクセル・クバール氏）というわけで、これは独、仏、伊みんな同じ。政党と労組の役割は、はっきり区別されている。

（つづく）

ヨーロッパ交流記

東海版編集委員長　大西　光夫

ところ変われば様変わる　各国の話題あれこれ

改札口のない地下鉄

「公共性」への姿勢に違いが

固い話が続いたので今回はやわらかく、いくつかの風景描写やエピソードの話。その一、フランスはパリ。

写真で分かりますか。昔は鉄道の駅だったのですが、改装して今は美術館になっているのですが。

「これが、駅か。よくそういう発想が生まれ、実現するものだ」という驚き。団員の一人の奈良の市会議員は「国鉄奈良駅も改装しようという話があり、見てきてといわれたが、何もかも比べものにならん」とあきらめ顔。

その二、街の風景。石は燃えないし壊れない。ボンもパリもミラノもローマも石、石、石。黒ずんでいるが大理石の建物を何百年も大事にしている。

その三、地下鉄や市電の話。西ドイツ。自販機で切符を買う。ここまでは日本と同じ。しかし、改札口がない。

フランス。自販機までは同じ。入り口にシャッターがあり、切符を入れると開く。しかし、出口には何もない。

どこまで乗っても（遠いですよ）同じ乗車賃。プラットホーム番号と路線番号を同じにし、案内表示もすべて終点を表示。単純で分かりやすい。

イタリア。一枚の切符で〝七十分間〟地下鉄も市電も乗れる。ドイツと同じでだれもいない。スタンプを押す。

これらのシステム、日本で可能だろうか。

その四、先ほどの駅改装そして緑が多い。しかも自然な感じで。これに比べると、日本のコンクリートジャングルや人工的緑は実に味気ないと思う。

駅員はむろん、とうせんぼのシャッターもない。電車の中で、機械で切符に日付を押すだけ。ただし、たまに検査にくる。不正が見つかると罰金は高

駅が変身して美術館に

の美術館はオルセー美術館という。

ルーブル美術館などにあったミレーやセザンヌやゴッホといった、最も日本人に馴染み深い印象派など、近代美術の作品が無数に展示されている。そのうちの一、二点を日本に持ってくるだけで、行列のできそうな作品ばかり。ガラスでおおわれてもいなければ柵もない。

こういう展示は日本ではできるでしょうか。「公共性」への姿勢や理解が違う、社会的責任観が社会の質になり、個人の資質を裏付けている。押付けの公共性ではない。

その五、ソ連。飛行機が到着して、空港内（バスで三分）にある仮泊するだけのトランジットホテルへ着くのに一時間半。他の国では（荷物が降りてくる時間を除く）五分か十分で外に出られる。

ルーズなのかていねいなのか、そのトランジットホテルでのこと。食事のお茶、大きな茶瓶に入っている。お代わりと思ってもらいに行ったら、答えは「オンリーワン」。一杯ぐらいお代わりがあってもいいのに。ゴルバチョフ書記長の下でのペレストロイカ、ぜひサービス部分でも積極的に推進してほしいと思う。

（つづく）

ヨーロッパ視察記

東海版編集委員長　大西　光夫

＝終＝

13日間の視察を終えて

交流の大切さ痛感

「自由・平等・連帯」

国民からの信頼は厚い

今回の視察はたった十三日間だったが、ヨーロッパの社会党と交流する意義は十分つかむことができた。「もっと系統的・継続的に交流する必要がある」と団員全員が痛感し、六月二日、党中央本部にそのような趣旨の意見書を提出して視察の締めくくりとした。

ヨーロッパ社会の悩みは同じ先進資本主義国として決して他人事ではなかった。平和問題や環境問題など、ともに解決すべき人類的な共通課題も多かった。

そして何よりも、ヨーロッパは近代化文明発祥の地であり、民主主義・社会主義運動の先達として素晴らしい歴史を持っていた。

経済成長や物質文明を人間が制御しなければならないことを体で知っており、自由・平等・連帯を人類永遠の理念として具体化することにひたむきだった。

西ドイツ社会民主党は、新綱領づくりに当たって、「自由・平等・連帯が基本理念。人間の発展に必要な技術以外は制御する」と言い、「民主主義とは、いかに政治参加するかだ」と強調する。

フランス社会党は移民労働者問題に対して、「人間としての連帯と責任」を訴え、イタリア社会党は「軍縮とソ連、東欧の政治変革と人権擁護は三位一体だ」とINF撤廃に賛意を表明する。

ヨーロッパの社会党は、こうして人類普遍の理念や民主主義を常に念頭に置き、そして、その蓄積の上に初めて花開いている。

われわれがヨーロッパの社会主義を修正主義、社会民主主義と軽蔑し、ソ連型、中国型の、マルクス・レーニン主義や前衛党論を信奉している間にも、ヨーロッパは着々と現実的に、かつ人間的に、資本主義の制御や社会変革と取り組んできていた。

社会の運営と建設に対し国民政党として責任を持ち、政権に果敢に挑戦し、国民の信頼を蓄積していた。

こんな注目すべきエピソードも聞いた。

第二次大戦後、それぞれ各国が戦争を総括し新たな出発をしたが、「ドイツはナチスを生み出したことを反省し」「フランスは、ナチスドイツに負けたことを反省し」「イタリアは、ファシズムを人民戦線で倒したことを誇りとした」と。それぞれの国の戦後の軌跡が見えてくる。

さしずめ、日本は「アメリカ（の物量と科学）に負けたことを反省し」、そして、アメリカを追い越せとがむしゃらに戦後四十年を突っ走り、世界で一、二を争う経済力を持つに至った、というところだろうか。

今日、日本社会党とヨーロッパ社会党との落差はあまりにも大きいが、ヨーロッパを離れる最後の日、イタリア社会党のマリアネッティ組織局長が「今は、既成の解決策のない時代だ。ともにつくるしかない。学ぶのではなく交流しよう」といった言葉を、締めくくりの言葉としたい。

そして、彼らも望んでいるように、この視察を契機に、交流の機運が大きく広がり、彼らとともにこの危機の時代を乗り切り、新たな時代をともに切り開いていけることを祈りたい。

友党のメンバーと視察団の記念撮影